

日本山岳会と私の登山②

日本山岳会におけるヒマラヤ 登山連鎖の軌跡 (1)

重廣恒夫

70年代から80年代にかけて、日本山岳会は高い目標をかかげながら、ヒマラヤ登山を実践してきた。

今回は各登山隊のリーダーとして、若い隊員を育ててきた重廣恒夫氏に、カンチエンジュンガ縦走から三国友好チョモランマ交差縦走までを綴ってもらった。

ヒマラヤ登山のはじまり

私のヒマラヤ登山への憧憬は、中学の時に読んだフランス隊のアンナプルナ登頂の記録『処女峰アンナプルナ』に始まった。高校時代に本格的に岩登りのトレイニングを始め、学生時代は岡山クライマースクラブに所属して岩壁登攀

に打ち込んだ。RCCⅡの同人として、先輩たちのヨーロッパ遠征の記録を参考にしながら、目標は「ヨーロッパ三大北壁」の登攀であった。

トレイニングの主体は高所の岩壁を想定した積雪期の継続登攀の実践だった。当時は日本全国に多

くのライバルが覇を競っており、長谷川恒男もその一人だった。目標にした「三大北壁」に手を触れることはなかったが、1973年、未踏のエヴェレスト南壁の登山隊を組織した湯浅道男さんに声をかけられ、初めての海外遠征へと旅立った。残念ながら目標にした南壁は完登できなかったが、ヒマラヤ1年生として、4月から11月までの8カ月間をネパールで過ごした。カトマンズでの下宿生活、輪送担当としてカトマンズからモンスーン中のキャラバンを敢行し、最初にベースキャンプに入り、登山終了後も隊の後始末に従事し、最後にカトマンズを離れた間に遭遇した多くの体験から、その後のヒマラヤ登山に役立つ多くのことを学んだ。

日本山岳会に入会

最初の第二次RCCエヴェレスト登山隊にはゼネラルマネジャーとして鹿野勝彦さんが参加していた。鹿野さんにインドの最高峰ナンド・デヴィに行かないかと誘われたのは、74年の末であったろうか。日印合同で8000に近い高所での縦走登山を成功させるために、南壁登山隊に参加した隊員達にも声をかけたのである。

75年3月、ナンド・デヴィ登山隊に参加するため日本山岳会に入会した。隊員のほとんどは大学山岳部出身者であったが、社会人山岳会からは他に高見和成と加藤保男が加わった。東京での準備は着々と進んだ。山岳部のOBや学生部員による梱包作業の手伝いは伝統を感じさせると同時に、若い

人達に「ヒマラヤへの憧憬」を萌芽させる場ともなっている感じがした。

77年には日本山岳協会が送り出した「日本K2登山隊」に参加し、灼熱の砂漠から始まるカラコルムの登山を体験した。79年には京都カラコルムクラブの「ラトックI峰登山隊」に参加した。前者はチームリーダーとして、後者は登攀隊長としてであった。この頃から隊員としての役割分担で、登頂・成功を獲得するための「現場リーダー」を担うことが多くなった。

80年には日本山岳会にとつては10年ぶりの大きな遠征となった。「日本山岳会珠穆朗瑪登山隊」に参加し、その後85年に関西カラコルム登山隊でマッシュヤブルム北西壁の初登攀やブロードピークのアルパインスタイルでの登頂を挟んで、76年と84年から95年まで日本山岳会の節目の登山隊に参加してきた。73年のエベレスト南壁からマカルー東稜まで一貫して流れていたのは、単なる既登峰の登頂ではなく「より高い山を、より厳しいルートから、より難しい方法で登る」という、自分なりのアルピニズムへのこだわりと、勤めている会社を

辞めないでヒマラヤ登山を継続するにはどうしたらよいかという自問自答であった。

84年、カンチェンジュンガ縦走

76年、日印合同登山隊で挑んだインドの最高峰ナンダ・デヴィの縦走登山は成功した。8000m近い高所で、2つの頂上を結んだ成果であった。当然、次の目標は8000mを超えた高々所での継続登攀である。カンチェンジュンガ縦走計画は、ナンダ・デヴィの縦走登山を成功させた直後から始まった。75年にインド22番目の州として併合されたばかりのシッキム側から、カンチェンジュンガの南峰・中央峰・主峰・西峰の8500m級の全山縦走を実現しようと、インド登山財団や政治ルートを通じて折衝した。

しかし、折衝は難航した。その間にも未踏峰であった南峰や中央峰が初登頂され、山学同志会隊による北壁の初登攀、日本ヒマラヤ協会隊による縦走の試みなど、いつまでもシッキム側に固執していかれなくなった。82年にネパール側からの登山計画を決断。その翌年、ネパール観光省からカンチェンジュンガ山群の登山許可を取得



南峰から主峰(右)、中央峰へ向け、カンチェンジュンガ縦走を開始する

した。すぐに準備活動に入ったが、いずれも既登峰であり登頂記録や写真資料の入手も容易で、登山計画の作成ははかどった。

しかし、資金調達は困難を極めた。一度に8000mを超える峰を登頂・縦走する登山では、前進基地以上の活動が複雑となり、要する物資も膨大で多額の資金が必要であった。資金調達の方法として日本テレビ放送網と読売新聞

社の後援を得るため、反対意見も多かったが縦走計画に「ハンググライダー飛行」を組み込んだ。その後、「カンチェンジュンガ委員会」も発足して対外的なバックアップの態勢が整った。また計画を推進する中で、85年の創立80周年記念事業にも組み入れられ、その後の準備は順調に進み、84年1月末には先発隊が成田を発った。

長いキャラバンの末、3月7日、ベースキャンプに入った。若手を中心とした登攀隊員23名、ハイポーター35名、学術や報道隊員を含めると総勢77名の大所帯を鹿野隊長が統括し、私は前進基地に陣取り、縦走の始まりとなる南峰へのルート工作や各隊のハイポーターの配備、荷上げ計画の調整などを行なった。登山の途中では雪崩によるキャンプの埋没など多くの障害はあったが、世界で初めて8500mラインの縦走に成功し



1984年5月20日、カンチェンジェンガ縦走に成功。
中央峰頂上のサポート隊

た。ただ主峰登頂はグレート・シエルフ経由となったこと、西峰にはまったく向くことができなかったことなど力不足も痛感した。併せて最後まで南峰や中央峰・主峰のルート工作や荷上げに従事しながら、時間切れで登頂できなかつた隊員が出たことも反省点である。

88年、チヨモランマ交差縦走

当初この計画は、東海支部が中国とかかわりを持ち、ネパール側との折衝を経て、86年1月に本部に計画委譲の申し入れがあり、同時に読売新聞社から読売グループ全体をあげてこの登山計画を支援し、共催したいという申し入れがあったものである。

86年5月の総会で日本・中国・

ネパールの三国友好登山計画実施の承認が行なわれ、これまでにないヒマラヤ登山計画が進行することとなった。友好登山隊での私の役割は北側の登攀隊長として、5月5日にチベット側から3国の登山隊員を頂上に到達させ、ネパール側に下ろすことに加えて、3名のテレビスタッフを頂上に到達させ、8848mからの大パノラマを世界に流すためのマスタープランを作ることであった。タクティクスに関しては、北側は日本と中国の代表が、南側は日本とネパールの代表が協議して作成することとなった。いずれも日本で原案を作成してそれをもとに検討することが多く、北京、カトマンズ、香

港、東京での打合せに忙殺された。隊員に関しては、5月5日に予定通り交差縦走を成功させるための隊員選考を行なった。もちろん経験者だけではなく、今回の経験を糧として今後大きく飛躍する若い隊員を選ぶことも忘れなかつた。選考の最終段階で、当時ヒマラヤで最も活躍していた山田昇の参加が決まったので、成功の確率は一段と高まった。

日本・中国・ネパールの三国は、元來登山の目的も異にしているし、日常生活している言葉とか食習慣等の生活環境が異なっている。それを極限の生活のなかで無理に「友好」という2文字に収めようとする、各国の隊員がお互いに気遣いすることになり、高所登山という閉じ込められた空間での、長期間の生活によって生じる軋轢が大きくなると考え、第一期・第二期は別々のテントで各国自由な生活をするようにした。ただ、最先端を行くルート工作、荷上げに関しては、三国が平等にその任に当たることにした。こうすることによって徐々に良いチームワークが形成され、最終アタック時の三国隊員間の信頼感となつてあら

われた。

ルート工作に関しては、最強メンバーを最先端に出した。その結果、予定通りに計画を進行させることができたし、後になってルート変更・修復をする必要も生じなかつた。スピーディーな登攀こそが安全を確保する最良の方法であるからである。ただし、最先端で行動する隊員にどうしても過度な負担がかかるきらいがあるので、3日行動、2日休養という原則を守り、特定隊員への疲労の蓄積が生じないように配慮した。しかしいざれにしても日本人隊員に大きな負担がかかったのは事実である。目標を成功に導くためには、チームを形成するメンバーが、自分の持っている能力を温存することではなく、お互いへの思いやりを発揮することによって、チーム全体の能力を向上させる事ができる。文化を異にする三国の隊員が集まって初期の目的を完遂するということは、各国隊員のライバル意識はもちろんの事であるが、競い合った後に生じた連帯感によって、目的意識が明確となり、最終的に「友好」という2文字に熟成されると信じたからである。